

学生の意見，アイデアを取り入れた授業方法の 改善に関する研究 その2

解決志向セラピーの質問方法を用いて

相 模 健 人

(臨床心理学研究室)

(平成15年5月22日受理)

A study of an improvement in the teaching methods. Second report.
Utilizing Solution-Focused-Therapy for obtaining the student's opinions
and their ideas

Takehito SAGAMI

I . 問 題

近年，大学教育に携わる者としてFD (Faculty Development) への関心は必須と言えるだろう。平成15年1月5日付の朝日新聞朝刊には一橋大学において全学部の授業において学生の授業評価を実施し，結果を教官名を含めて公開することを決めたとの記事が載っている。松山大学においても同様の教官評価システムを導入することを発表している(愛媛新聞，2003年4月3日付朝刊)。我が愛媛大学においても教官の自主的なものであるが授業評価報告書の提出が義務付けられている状態である。

このようなFDへの関心が高まる状況において，筆者は学生の意見，アイデアを取り入れた授業研究を行った⁽¹⁾。本研究は引き続き，学生の意見，アイデアを取り入れたよりよい授業のあり方をめざし，授業研究を行った。

また前回の研究で課題として上がっていた教師の対応，学生の積極的な授業参加を授業にさらに発展させ，その試みへの評価も行った。

II . 目 的

愛媛大学教育学部の教職科目A必修授業「教育相談論」の授業において，解決志向セラピー (Solution-Focused-Therapy) で用いるスケーリングクエスチョン (Scaling Question) を用

いた学生の授業評価を行い、学生の意見を取り入れた授業方法改善の過程を検討し、大学におけるよりよい授業のあり方について考察する。

Ⅲ．方 法

1．授業について

- ①授業名：教育相談論
- ②授業時間：毎週月曜 4 時限（午後 2 時50分～ 4 時20分）
- ③授業期間：10月21日～ 2月17日（計13回）
- ④受講登録者数：160名（内院生 2 名）教育学部新課程および法文学部学生対象
- ⑤講義教室：教育学部大講義室
- ⑥授業内容：授業内容は筆者のスクールカウンセラーとしての経験を生かし、システムズアプローチを用いたスクールカウンセリングを主に取り扱った。授業形式は講義形式で13回行った。講義回数が13回となったのは、教育学部と法文学部の授業日程の兼ね合いの関係でやむを得なかった。

また今期の講義では以下に述べる授業内容の改善を行った。

- i 前回の研究での課題であった学生の授業への積極的参加を取り入れ、新たにミニシンポジウムを授業に 2 回導入した。
- ii 前回の研究で好評であった現任教員との対談を講義の第 2 回と第13回の 2 回行った。第 2 回では学生からの質問に答える形で学校の現状について筆者と現任教員が対談し、第13回ではレポート課題を元に実際の学校現場での教員の対応について学生と討論した。
- iii 学生の感想をフィードバックとして次回の授業に後述する「授業評価シート」の回答を筆者がまとめて資料として配った。
- iv 前回の研究では OHP で提示していた教材が見えにくいとの声があったので、Microsoft Power Point でプレゼンテーション教材を新たに作成し、プロジェクターで投影した。
- v 全体的なそれぞれの授業が関連していくよう講義内容を再考した。

授業はマイク、ビデオ、プロジェクターといった視聴覚機材を必要に応じて用いた。具体的な内容は以下のようになる（括弧内は用いた視聴覚機材やその回で用いた教材。マイクは毎回用いたため省略）。

授業内容

- | | | |
|-------|--------|---|
| 第 1 回 | 10月21日 | ガイダンス |
| 第 2 回 | 10月28日 | 学校の実態について
（学生の意見をもとに筆者と現職教員と対談） |
| 第 3 回 | 11月11日 | スクールカウンセリングについて（相談室の写真を回覧） |
| 第 4 回 | 11月18日 | スクールカウンセラーは必要か否か？
（ミニシンポジウム，プロジェクター使用） |
| 第 5 回 | 11月25日 | 事例Ⅰ 問題行動
- 学生が事例を実演 |

- (プロジェクター使用，以下事例は同様の方法で行った)
- 第6回 12月2日 システムズアプローチについて その1
- システムズアプローチの説明(ビデオ使用)
- 第7回 12月9日 システムズアプローチについて その2 事例Ⅱ いじめ
(学生同士でコンプリメントを実際に体験)
- 解決志向アプローチの説明(プロジェクター使用)
- 第8回 12月16日 不登校は厳しく対応するか? やさしく対応するか?
(ミニシンポジウム)
- 第9回 1月20日 事例Ⅲ 不登校 その1 (レポート課題を提示)
- 第10回 1月27日 事例Ⅲ 不登校 その2
- 第11回 2月3日 事例Ⅳ 保健室登校 その1
- 第12回 2月10日 事例Ⅳ 保健室登校 その2
- 第13回 2月17日 教員の対応について
(レポート課題について現職教員と学生でディスカッション)

2. 授業評価について

各授業時間の終わりに「授業評価シート」を配り，学生に授業評価を行ってもらった。「授業評価シート」は出席，遅刻票の役割をかねており，学生に記入することを義務付けた。ゆえに記名式である。ただし出席，遅刻の別以外は学生の成績評価には全く使用していないし，そのことを学生に周知している。

「授業評価シート」は3つの質問で構成されている。質問1は「今日の授業は1を『わからない』，10を『わかりやすい』とするといくつでしたか? 数字で教えてください」であり，数値で答えてもらった。質問2は「今日の授業はどんなところがよかったから，質問1の答えの数になったと思いますか?」，質問3は「来週の授業で少しよくなって，質問1の答えより1上がったとしたらどんな授業になっていると思いますか?」であり，学生に自由に記述してもらった。その他として質問欄を別にもうけている。毎回の平均，代表的な感想と質問への回答を，次回の講義でプリントとして配っている。

また最終回の第13回講義は「最終授業評価シート」を配り，学生に授業全体の授業評価を行ってもらった。

「最終授業評価シート」は5つの質問で構成されている。質問1は「この授業全体を1を『分かりにくい，難しかった』，10を『分かりやすい，理解できた』とするといくつになるでしょうか?」であり，数値で答えてもらった。質問2は「質問1の答えになった理由をお書きください(賛否含めます)」であり，これに関しては「授業評価シート」と異なり，批判も積極的に書く形とした。質問3「あなたが同級生，後輩にこの授業を薦めるとしたらどんなことを言って薦めますか?」，質問4「あなたが同級生，後輩にこの授業を薦めないとしたらどんなことを言って薦めませんか?」，質問6「あなたが相模だったとして，この授業を学生にとって今よりも必要な授業とするためにどんなことを具体的にしますか?できるだけたくさんお書きください。」については自由記述とした。また本研究では新たに質問5に「授業内に行った以下の項目で授業理解に役立ったものには○を，役立たなかったものには×をつけて下さい」を加えて，「授業評価シートのフィードバック(毎回実施)，講義形式の授業(第3，6，

7回実施), ミニシンポジウム(第4, 8回実施), 現役の教員のお話(第2, 13回実施), コンプリメントを実際に体験(第7回実施), 近くの席の人と討論(各授業内で実施), 事例の劇形式の実演(第5, 9~12回実施), パワーポイントによる事例提示(第5, 7, 9~12回実施), 授業内の資料, プリント(毎回実施)ビデオ鑑賞(第6回実施)」の選択項目から自由回答で選択してもらった。その他として学生に自由に意見を記述してもらった。

3. 結果の処理

「授業評価シート」の質問1(「最終授業評価シート」を含める)については, 毎時間の平均を出し一要因の分散分析を行い, 下位検定としてt検定を行った。

「最終授業評価シート」の質問5に関しては選択の順位の多かった項目を集計した。

IV. 結 果

1. 授業評価の量的分析

表1に「授業評価シート」の質問1の結果を示す。各回の出席者の増減は学生の都合による欠席に加え, 介護実習等によるものもある。グラフにした図1を見ると, 平均得点が回を追うごとにだだらかに上昇していていることが理解できる。

このことについて一要因の分散分析を行ったところ, 0.1%水準で優位差が見られた(表2参照)。さらにt検定を行ったところ, 第4回と第5回が10%水準で, 第8回と第9回, 第9回と第10回, 第10回と第11回が5%水準で, 第2回と第3回, 第12

表1 「授業評価シート」質問1の結果

講義回数	平均	標準偏差	出席者数
第2回	7.31	1.54	147
第3回	6.39	1.84	139
第4回	6.61	1.82	147
第5回	7.04	1.82	149
第6回	7.15	1.49	138
第7回	7.22	1.54	141
第8回	7.25	1.7	142
第9回	7.59	1.37	145
第10回	7.72	1.34	135
第11回	8.05	1.45	143
第12回	8.24	1.41	140
第13回	8.81	1.31	124
最終評価	7.82	1.39	124

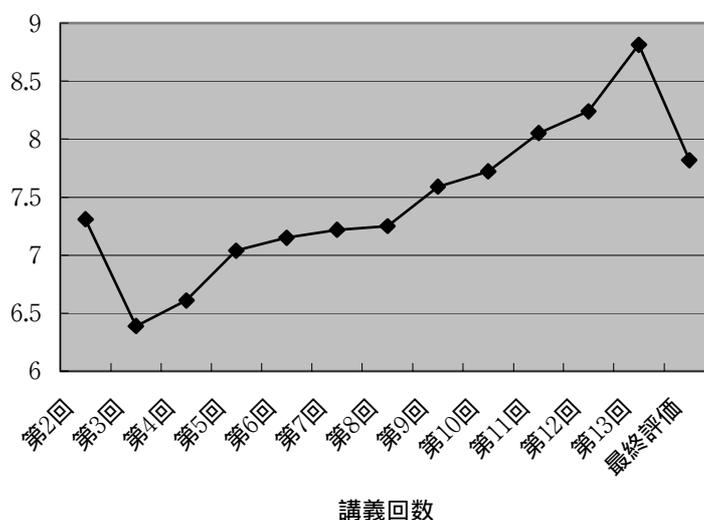


図1 「授業評価シート」質問1の結果

回と第13回，が第13回と最終評価が0.1%水準で優位差が見られた（表3参照）。

表2 一要因分散分析の結果

変動因	SS	df	MS	F
講義回数	347.09	8.285	41.894	17.821

****P .01

2. 授業理解に役立った活動

表に「最終授業評価シート」の質問5の集計結果を示す。表の授業理解に役立った授業内の活動においては1位の「現役の教員のお話」が95%ときわめて高い数値を示している。ついで、「授業内の資料，プリント」，「授業評価シートのフィードバック」といった授業内での資料が選択数が高く，続いて「ミニシンポジウム」，「パワーポイントによる事例提示」と本研究での試みが評価されている。

一方，表の授業理解に役立たなかった授業内の活動を見ると1位の「近くの席の人と討論」が半数近くの44%が選択している。2位の「コンプリメントを実際に体験」と合わせると表の授業理解に役立った授業内の活動の最下位と対応している。しかし4位以下は選択率が15%以下であり，概ね授業内での活動が役立っているようである。

表3 t検定の結果

	t値	自由度
第2回 - 第3回	4.09	124
第3回 - 第4回	-1.08	125
第4回 - 第5回	-1.93	131
第5回 - 第6回	-0.92	125
第6回 - 第7回	-0.64	121
第7回 - 第8回	0.37	127
第8回 - 第9回	-2.25	131
第9回 - 第10回	-2.07	122
第10回 - 第11回	-2.11	123
第11回 - 第12回	-1.22	128
第12回 - 第13回	-4.66	116
第13回 - 最終評価	8.88	122

*P .10, **P .05, ****P .001

表4 授業理解に役立った授業内の活動

順位	項目	選択数	%
1位	現役の教員のお話	118	95%
2位	授業内の資料，プリント	98	79%
3位	授業評価シートのフィードバック	89	72%
4位	ミニシンポジウム	88	71%
5位	パワーポイントによる事例提示	86	69%
6位	ビデオ鑑賞	78	63%
6位	事例の劇形式の実演	78	63%
8位	講義形式の授業	76	61%
9位	コンプリメントを実際に体験	56	45%
10位	近くの席の人と討論	39	31%

表5 授業理解に役立たなかった授業内の活動

順位	項目	選択数	%
1位	近くの席の人と討論	55	44%
2位	コンプリメントを実際に体験	34	27%
3位	事例の劇形式の実演	29	23%
4位	授業評価シートのフィードバック	18	15%
5位	ビデオ鑑賞	17	14%
6位	講義形式の授業	16	13%
7位	パワーポイントによる事例提示	15	12%
8位	ミニシンポジウム	13	10%
9位	授業内の資料，プリント	4	3%
10位	現役の教員のお話	2	2%

V. 考 察

まず、本研究における授業評価が有効であったかどうかについて述べる。図1を見れば学生の授業評価がなだらかに上がっていることが理解でき、結果の通り、有意差もみられた。学生の反応にも「先生ご自身も“授業をよくしよう”という取り組みをされ、その結果としての数値です。」(最終授業評価シートの感想より 質問1の回答は8)といった意見があり、たとえ細かいことであっても学生の意見やアイデアを反映させながら授業をすすめる筆者の授業評価の方法が学生にもある程度受け入れられていると考える。

次に方法の i ~ v に書いた本研究における授業の新たな試みが学生にどのように評価されたかを考えたい。まず方法の i に書いたミニシンポジウムの導入であるが表3の t 検定の結果では特に優位差はなかったが、表4を見ると7割の学生が授業理解に役立ったと答えており、授業理解には役立ったようである。ミニシンポジウムが行われた授業での感想には「学生による討論会という形がよかった」、「学生間での意見交換ができて画期的であると思う」、「生徒(他の人達)の意見が聞けて勉強になりました。また発表をするにあたってみんなと意見をかわし、話し合う機会ができてよかったです。とてもためになる授業でした。ありがとうございます」、「討論の内容が濃くて良かったです。また指定討論者やそれ以外の方の質問、意見も深く、自分自身いろいろなことを考えることができてよかったです」、「質問が的を得た質問であり、そこから深い議論に発展できたところがよかった」といった意見が多く、学生に授業への積極的参加は授業理解を深める上で重要であるように思える。

一方、「議論が分かりにくかった。展開が早すぎて考える余裕がない。意見が入れ替わりしていて、両者の望む所(視点)がかみあっていないような気がして、理解するのが難しかった」、「一部ではなく授業を受けている学生全体が参加しているかたちへしてほしい」、「時間がたりなかった」といった学生の意見もあり、ミニシンポジウムについてはさらなる改善の余地があるように考える。

次に ii の現役教員との対談であるが、結果の表1~5を見て分かる通り、これが最も学生の評価が高かった。特に最終回の第13回講義の質問1の結果は8.81であり、さらに表4においても95%の学生が授業理解に役立ったと答えており、学生の支持は圧倒的である。学生の意見には「テレビなどで表面的に悪い部分しか知ることができないことを、現場の声としてリアルに知ることができた。あまり関わりあうことができないのに、現実問題としてとらえなくてはならない所なのでとても興味深く自分のためになった」、「対談の内容が多様でいろんな角度から問題を見つめることができた」、「理論を講義形式で学ぶより実践的な授業だったと思う」があり、対談形式で教育現場を知るといった内容が支持されていることが分かる。

さらに第13回講義ではこの対談内容を発展させ、レポート課題について教員の目から対応を話し、直接、学生と討論する形式にした。その回の学生の感想では「自分が考えたレポートの課題に対する答えと、実際の教師がとる対応というのを比較し、そこから学びとれたのでとてもためになった授業であった。やはり、実際の教師じゃないと分からない教師の視点があったと思う」、「やはり現場の先生の声が聞けることはうれしい!!自分の考えがよかったのかどうかをたしかめることができた」、「通常の授業ならば、『レポートは提出したら終わり』ということ、他の人の意見は聞くこともなかったが、今回のような取り組みによって他の人の意見(し

かも現職の先生の)を聞くことができてよかった」といったものが多く，学生にとって有益だったようである。

iiiの「授業評価シート」のフィードバックについては表4の授業理解に役立った項目では3位であり，8割近い学生が評価している。学生にも「毎回アンケート結果を報告してくれたり，私たち学生の意見を聞き入れてくれたので，親切的な講義だった」，「授業評価シートを細かく書いてくれているのでありがとうございました」との意見があり，学生の意見のフィードバックは役立っているようである。但し，これについては教官側の負担が過重であり，今後TAの活用など，もっと柔軟な形で行うことが必要であろう。

ivのプレゼンテーション教材の導入については表4より7割近い学生が授業理解に役立ったと選択しており，学生の意見も「レジメとプロジェクター両方を使って分かりやすかった」，「スクリーンを用いることによって視覚的であった」，「今日もパワーポイントを使っていたのですごく分かりやすかった」などOHPよりは見えやすく好評であったと言えるろう。

vの講義内容の再考であるが，例えば第4回のミニシンポジウム「スクールカウンセラーは必要か否か？」の翌週にスクールカウンセリングの実践例を紹介すると図1のように授業評価が大きく上がっており優位差も見られた。学生の感想にも「今までスクールカウンセラーという存在は必要なのだろうかと思っていましたが，今日の話聞いていて，担任の先生ではできない解決方法だと思い，私の中でスクールカウンセラーの必要性が高まったような気がしました」といったものがあつた。同様に第8回目のミニシンポジウム「不登校は厳しく対応するか？やさしく対応するか？」の次の回に不登校の事例を提示したことに表3より優位差が見られ，学生の意見にも「不登校のミニシンポのあとにこの事例を持ってきた点がタイムリーでよい」といった評価があつた。レポート課題と第13回の教員との対談を組み合わせたことも加えて，授業内容を再考し，より有機的に各講義を関連させたことは学生の授業理解にもいい影響を与えたと考える。

最後に今後の課題を述べたい。マイクのノイズや暖房など細かい環境の問題はなかなか改善されず学生の感想でも不満が多いようである。大学事務との交渉を通して改善していきたい。また学生の授業態度について私語など目に余る事態も見受けられているので今後は授業内での積極的な注意も必要だと筆者自身，感じている。また学生の感想には「学生の意見をもっと聞くように」といった意見も多く見られ，筆者の姿勢がさらに問われるところであろう。また本研究でも前回に引き続き学生の要望で最も多かったのは，この講義を少人数制にしてほしいとの要望であつた。現在，本学には4名の臨床心理士資格を持った教官がいるが，この『教育相談論』を担当する教官は非常勤講師を除けば，筆者一人である。明らかに異常な状況であり，改善が望まれるところであろう。

以上のような課題を踏まえて，筆者はさらなる授業改善に取り組み，その成果を今後，研究として報告していく予定である。

引用文献

- (1) 相模健人 学生の意見，アイデアを取り入れた授業方法の改善に関する研究 その1 - 解決志向アプローチの質問方法を用いて - 愛媛大学教育学部紀要 第I部 教育科学 第49巻 第2号 2003年 57 - 77 .

